

史跡 国泰寺跡 IV

平成12年度 発掘調査報告書

2001.3

北海道厚岸町教育委員会

序

史跡国泰寺跡は、近世東蝦夷地の歴史を伝える遺内でも数少ない文化財で、昭和48年10月29日に国の史跡に指定されました。昭和60年の本堂及び庫裡・住宅の改築により景観の変化は見たものの、境内はよく当時の佇まいを残しており、観光客による賑わいを見せています。

平成4年から史跡整備に関わる委員会を組織し、管理や整備についての基本方針が示されており、その報告を基に平成10年度から発掘調査を実施しております。

平成10年度の調査では、直接国泰寺に関わる遺構は検出されませんでした。4000点を越える陶磁器類などの遺物や道路に付随すると見られる溝状遺構が確認されました。平成11年度には、境内地内における溝状遺構の延長部分の調査を中心に実施し、境内地の範囲を推定する遺構が確認され、幕末から明治期にかけての貴重な資料を得ることができました。

今年度は、昭和59年度調査区の隣接地の調査を中心に実施し、土留めと思われる石列や敷石と思われる遺構が確認されました。今後『日鑑記』等の文献との検討を継続し、国泰寺跡の史跡整備を実施していく所存でありますので、一層のご支援ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、この事業を実施する上で、多大なご指導ご助言をいただいた諸機関・諸氏に対しまして、深く感謝の意を表する次第であります。

平成13年3月

厚岸町教育委員会教育長 小野寺 英樹

例 言

1. 本書は、史跡国秦寺跡保存整備計画に基づく遺構確認調査の報告書である。
2. 発掘調査は、平成12年6月19日から7月7日にかけて実施し、引き続き平成13年3月31日まで整理作業を行った。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査主体者	厚岸町教育委員会	教育長	小野寺英樹
事務局		生涯学習課長	大野榮司
		生涯学習課長補佐	湯浅哲人
		管理指導係長	萬力雄
		文化財係主事	小林 彰
調査担当者		学芸員	熊崎農夫博
調査指導者	釧路市埋蔵文化財調査センター所長		西 幸隆
調査参加者	小林吉男（教育委員会）		
	遠藤沙織、大倉慶子、大西瑞木、緒方知子、加藤健太郎、金子雅明、河崎孝介、工藤景子、古賀久美子、関口裕太郎、関本裕介、竹村沙織、千葉優作、得永奈緒子、鳥本恭子、林里香、細谷由未、中村クミ子、山田健太郎、山田盛雄、鷺尾浩幸（北海道教育大学教育学部釧路校）		
作業員	須見伸一、涌井令子、渡辺裕子、黒田久枝、黒田朱子		
4. 本書の編集、執筆、写真撮影は調査担当者があつた。
5. 主要遺物の実測・写真撮影については、（株）シン技術コンサルに委託した。
6. 陶磁器の鑑定については、北海道埋蔵文化財センター鈴木信氏に依頼した。
7. 調査、整理作業にあつては下記の諸機関、各氏からご指導ご協力をいただいた。文化庁、北海道教育委員会、北海道埋蔵文化財センター、北海道教育庁釧路教育局、釧路市埋蔵文化財調査センター、釧路市立博物館、北海道埋蔵文化財センター北海道開拓記念館
松浦暢道（国秦寺住職）、佐藤有紹、眞壁智誠、赤松守雄、添田雄二、鈴木信（敬称略）
8. 調査によって得られた資料、諸記録は厚岸町教育委員会が保管する。

目次

本文目次

I. 調査の目的	2	4. 遺構	7
1. 調査の目的	2	5. 遺物	12
II. 調査の内容	2	III. まとめ	18
1. 地形と現況	2		
2. 調査区域と調査方法	2		
3. 層位	7		

図目次

図1 国泰寺の位置	1	図8 昭和59年度検出遺構 (礎石及び配石)	11
図2 国泰寺周辺の現況と調査区域	3	図9 遺物実測図1	15
図3 調査区	4	図10 遺物実測図2	16
図4 昭和59、平成10・11・12年度 遺構配置図	5	図11 遺物実測図3	17
図5 石列及び敷石平面図	8	図12 釧路国厚岸郡泰禅寺の真景	19
図6 平成11年度検出遺構 (溝状遺構及び土留め板)	9	図13 現今境内略図	19
図7 平成10年度検出遺構 (溝状遺構)	10	図14 安政4～6年以降の国泰寺平面図	20

表目次

表1 出土遺物一覧	13	表2 出土銭貨一覧	13
表3 陶磁器観察表	14		

写真目次

写真1 国泰寺境内	20	写真10 平成10年度溝状遺構検出状況	24
写真2 調査風景	22	写真11 平成11年度溝状遺構及び 土留め板検出状況	24
写真3 調査風景	22	写真12 昭和59年度配石遺構	25
写真4 実測状況	22	写真13 昭和59年度配石遺構(4-D区)	25
写真5 列石検出状況(南東より)	23	写真14 出土遺物1	26
写真6 列石検出状況(北西より)	23	写真15 出土遺物2	27
写真7 敷石検出状況	23	写真16 出土遺物3	28
写真8 敷石検出トレンチ	23		
写真9 平成10年度道路及び 溝状遺構土層断面	24		

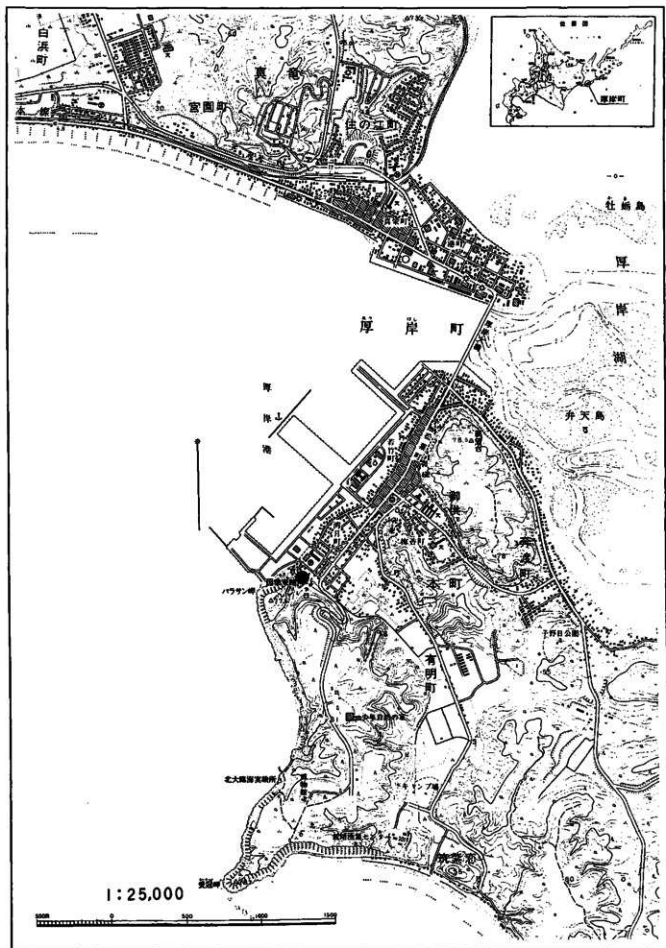


図1 国泰寺の位置

I. 調査の目的

1. 調査の目的

史跡「国泰寺跡」は、厚岸町湾月町1丁目に所在し、昭和48年10月29日に国の史跡に指定された。その後、老朽化した本堂・庫裡の改築工事の決定を機に、かつての国泰寺の位置を明らかにするための発掘調査が昭和59年に行われ、約500点の遺物と礎石及び配石遺構が検出された。

その後、史跡の一部公有地化を契機に平成4、5年に保存管理計画を策定し、引き続き保存整備基本計画の策定により史跡地の整備方針が定まった。

それを受けて整備に先立つ遺構確認及び範囲確認調査を平成10・11年度に実施し、約5000点の遺物と溝状遺構及び土留め板を検出した。

今回の調査は、昭和59年度に確認された礎石及び配石遺構と溝状遺構との関係の追究及び門柱跡の確認を目的として、史跡の現状変更の許可を得て当該地の発掘調査を実施することとなった。

II. 調査の内容

1. 地形と現況

国泰寺の境内は、標高3～4m前後の低地平坦面と沢側に約1mの段差を持つ標高5～7m前後の平坦面の二面からなっており、前者は創建以降の本堂が建て替えられたとみられる場所で、昭和59年の発掘調査で配石遺構や礎石が確認されている。また後者には現本堂・庫裡が建てられている。

今回の調査区域は、現境内地の北西側の標高3～4mの平坦地で、昨年度の調査区の南東側部分である。北東側は側溝によって区切られており、樹木の密集度がやや低い箇所の一部昭和59年度の発掘区と重複している(図2)。昨年度の調査により、戦後かなり盛土し整地したことが確認された。

2. 調査区域と調査方法

グリッド設定にあたっては、町道湾月町横1の通りを基準とした昨年度の5m×5mの小発掘区を延長して、発掘区をカバーすることとした。小発掘区は、北西から南東方向へA～Mライン、北東から南西方向へ10～16ラインを設け、北西隅の杭を基準として110、111・・・グリッドと呼称した(図3)。

当該地区は、昨年度検出された溝状遺構及び土留め板に直交する箇所にあたり、門柱跡や板塀の検出が予想されたが、境内地に植えられた種々の樹木に遮られ面的に追求する事が困難な状況であり、短期間の調査ということで北西～南東方向及び北東～南西方向に幅約1mのトレンチを数カ所設定することとした。

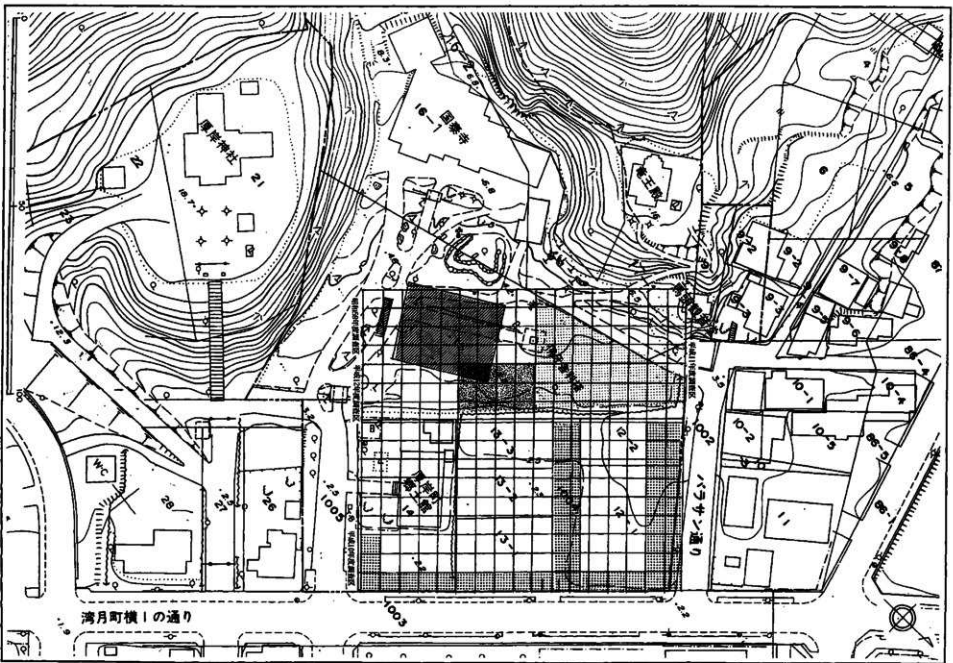


図2 国壽寺周辺の現況と調査区域

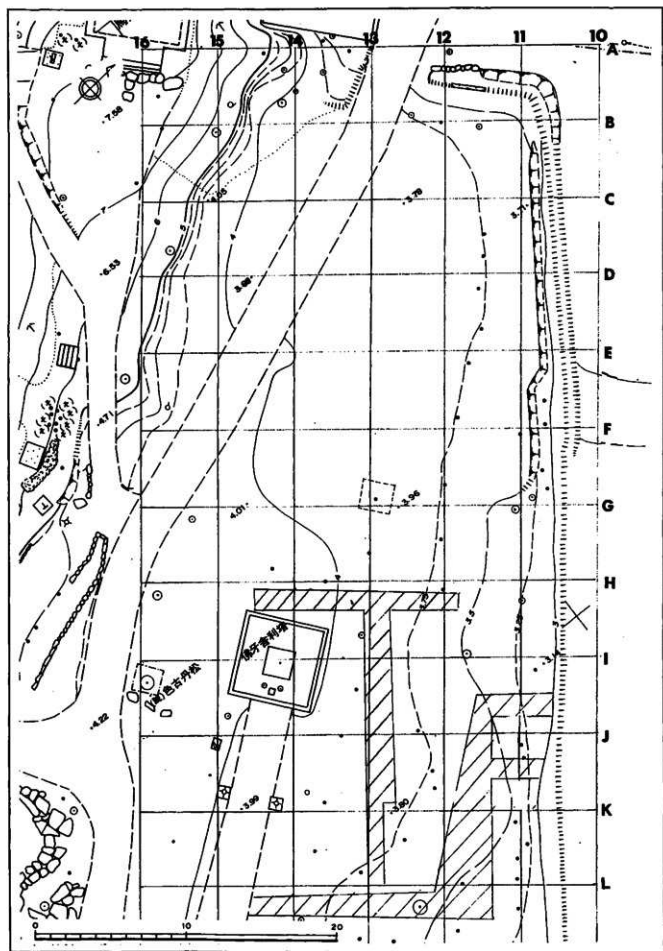


图3 调查区

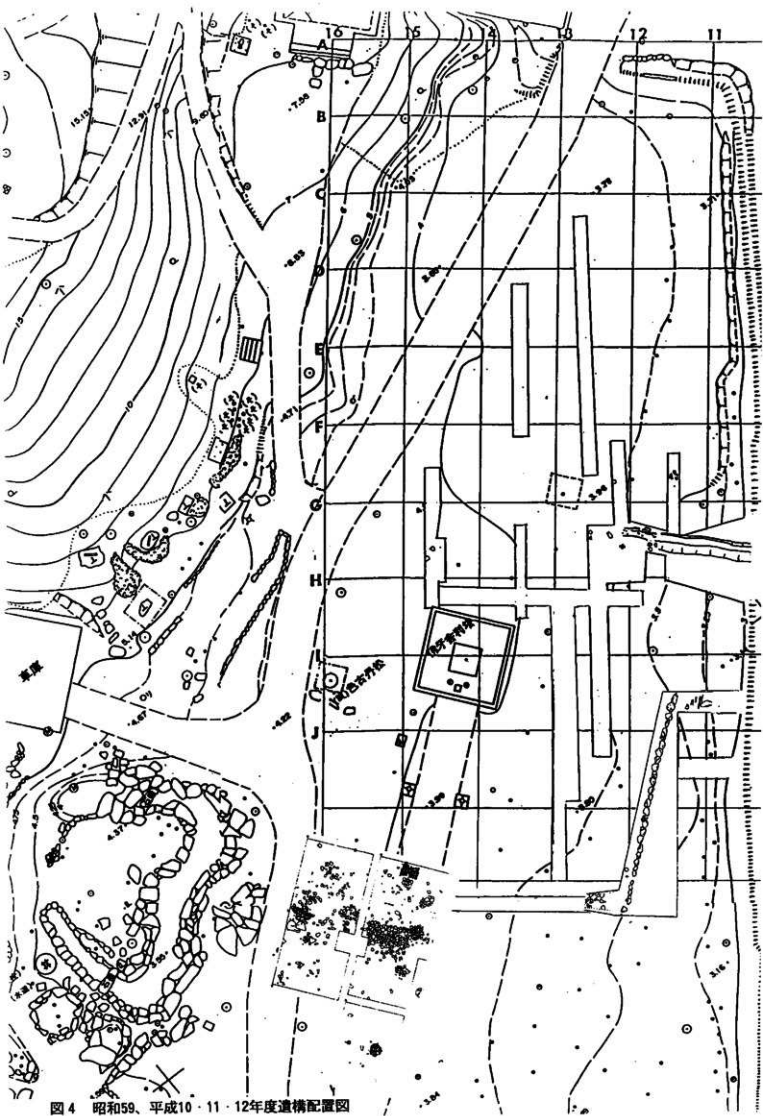
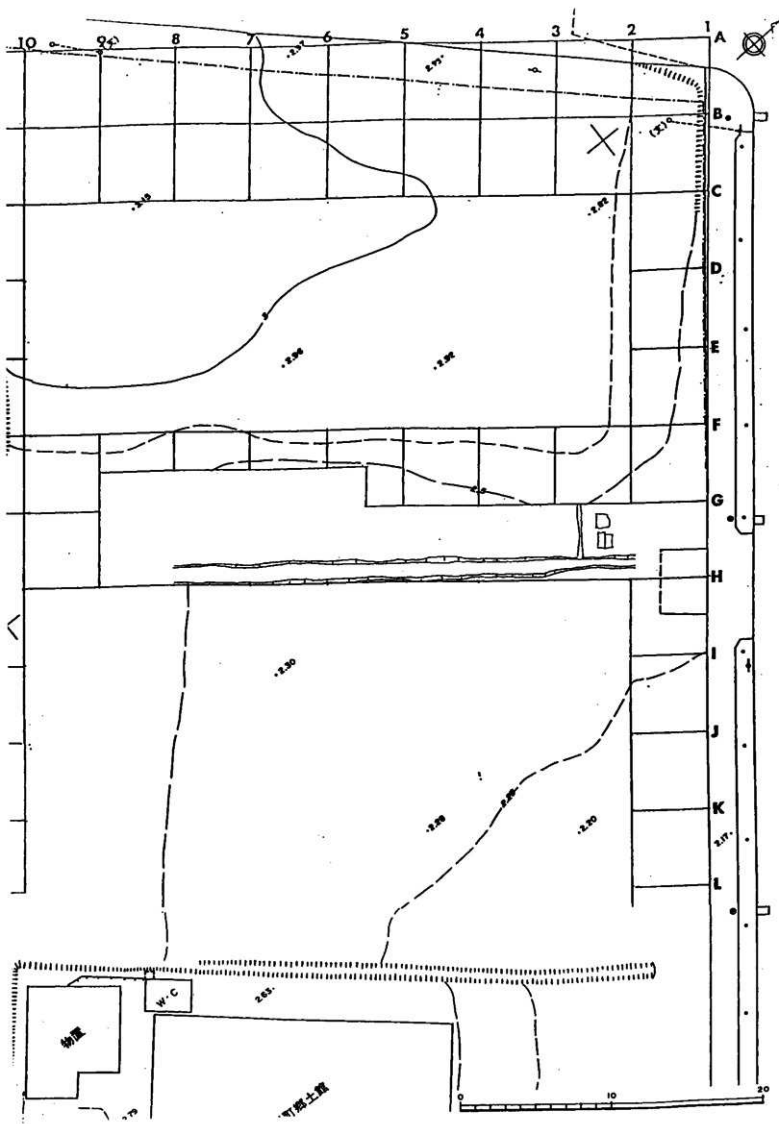


図4 昭和59、平成10・11・12年度遺構配置図



当初H12～M12グリッドに長さ20m、幅1m、I11～M11グリッドに長さ15m、幅1m、H11～H14グリッドに長さ15m、幅1m、I10～I11グリッドに長さ5m、幅1m、J10～J11グリッドに長さ5m、幅1mのトレンチを設定したが、H12～J12グリッドについては1m拡張しての掘削となった(図3)。

調査区の表面については、昭和59年度の土層断面図を参考に約50cmを重機で除去する予定であったが、昨年度の調査の結果1m以上の盛土が確認されており、部分的に高低差があることが予想されたので、昨年の上層にあたる直上まで重機で上面を剝取し、その後手作業で慎重に掘り進めた。

発掘調査は、昨年同様沢水の流入に悩まされその除去に多くの日数を要し、境内地に植えられた種々の樹木により一部調査ができない部分もあったが、最終的な調査面積は100㎡であった。

遺構及び遺物については、1/20の図面に出土位置、レベル、種別等を記録し取り上げた。盛土及び攪乱部分の遺物はグリッドごと一括して取り上げた。

写真撮影は、主要な遺構・遺物、調査状況、遺跡風景等をモノクローム、カラー、リバーサルフィルムにて適宜実施した。

遺構確認後、重機により埋め戻しを行った。

3. 層位

調査区域内における層序は、人為的攪乱が多く各区により一定ではなかったため、ここではL11～L14グリッドについて概説する。

地表面から20～30cmの厚さで小礫を含む灰褐色土があり、その下に部分的に5cm程度の厚さの黄褐色土、その下に5～10cmの厚さで灰褐色粘質土が認められた。その下部に15cm程度の厚さで小礫混じりの褐色土、その下に2～8cmの厚さで灰褐色粘質土が検出され、この褐色土及び灰褐色粘質土が昭和59年度調査時のI・II層にあたる。次に一部炭化物層を挟んだ小礫混じりの暗褐色土があり、これがIII層にあたり10～20cmの厚さで堆積していたが、L12ラインの1m程南西で急に落ち込んでいた。H12～L12にかけてのトレンチでも、色調は若干異なるが同様の層序が認められた。

I11～L11グリッドの遺構検出箇所においては、表土に二次堆積土が厚く堆積しており、層序も一様ではなかった。この二次堆積土は、昭和30～40年代に道路改良工事による残土を搬入したものである。

4. 遺構

今回の調査では、国泰寺に直接関わる門柱跡等の遺構は検出されなかったが、I11～L11グリッド及びL12グリッドで列石及び敷石を検出した(図5)。列石は現地表面から1m下で長さ15.7m、幅約50cmで36個が検出された。大小はあるものの自然石で長さ50～60cmのものが多かった。大ぶりの石の間に小ぶりの石を挟んでいる箇所があり、南西側からの地面の傾斜から土留め石の可能性が考えられる。

I11グリッド及びJ11グリッドの南西～北東方向のトレンチにおいて、この列石の約1m北東側に幅90cm程の木樋状のものを確認し、この木製品を挟んで40×20cmと90×45cmの偏平な自然石が検出されたが、沢水の流入により詳細は把握できなかった。また、J11グリッドの南西～北東方向のトレンチにおいても、同様の距離で木樋状のものを確認したが、これらが連続しているかどうかの

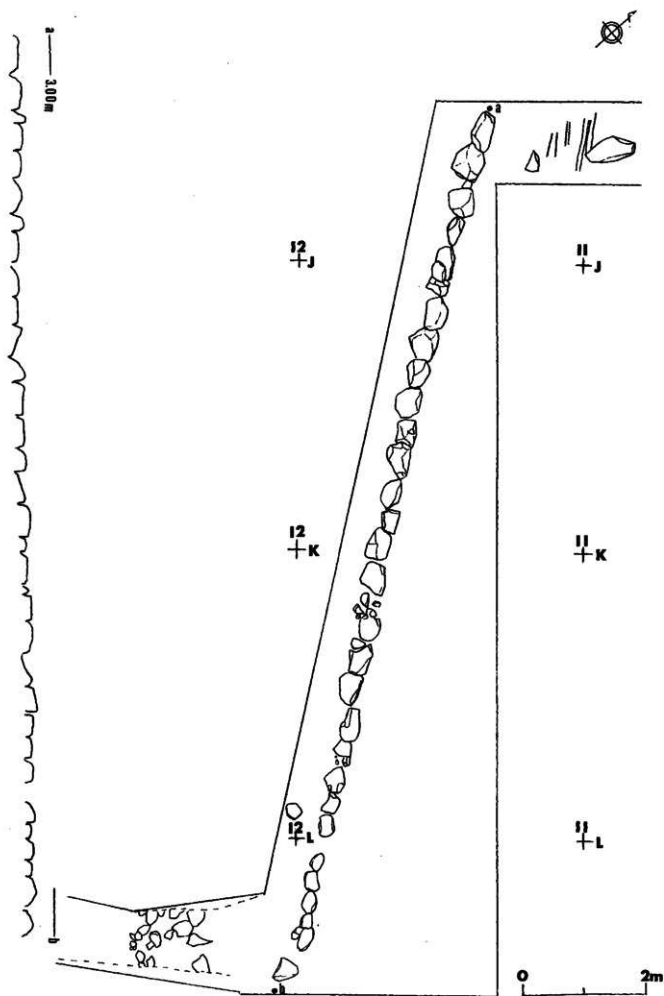


図5 列石及び敷石平面図

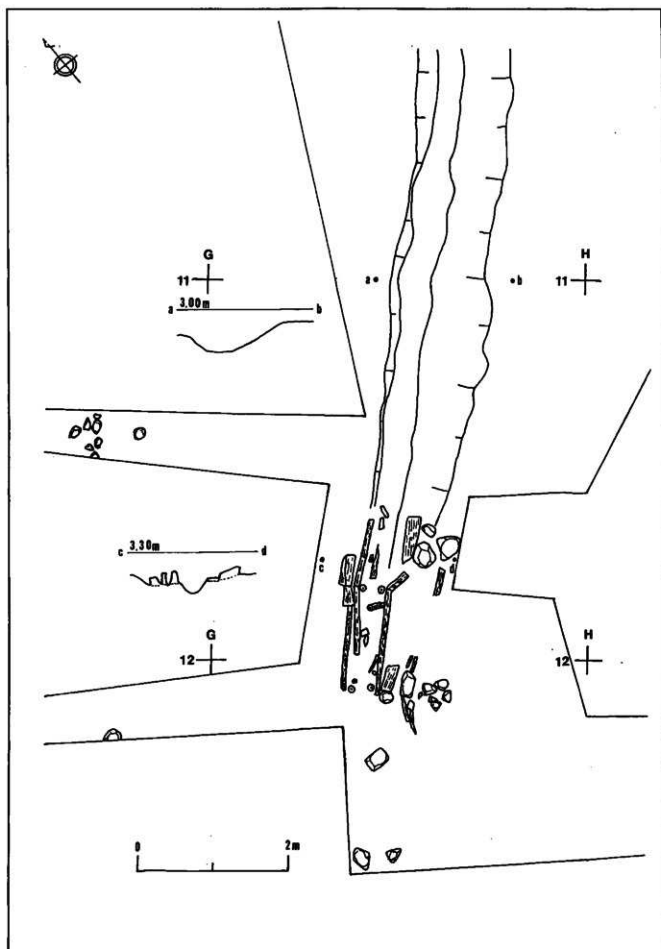


図6 平成11年度検出遺構（溝状遺構及び土留め板）

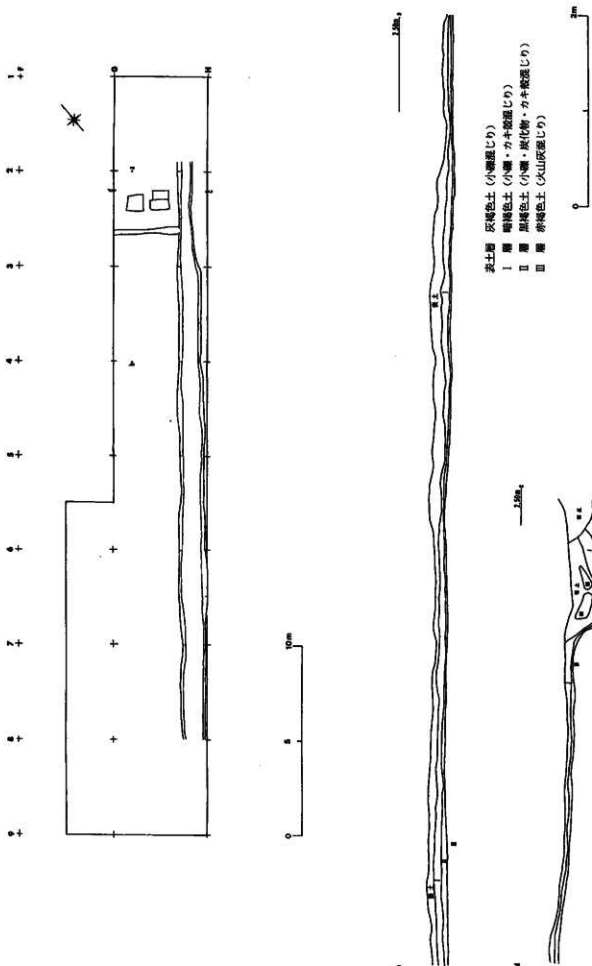


図7 平成10年度検出遺構 (溝状遺構)

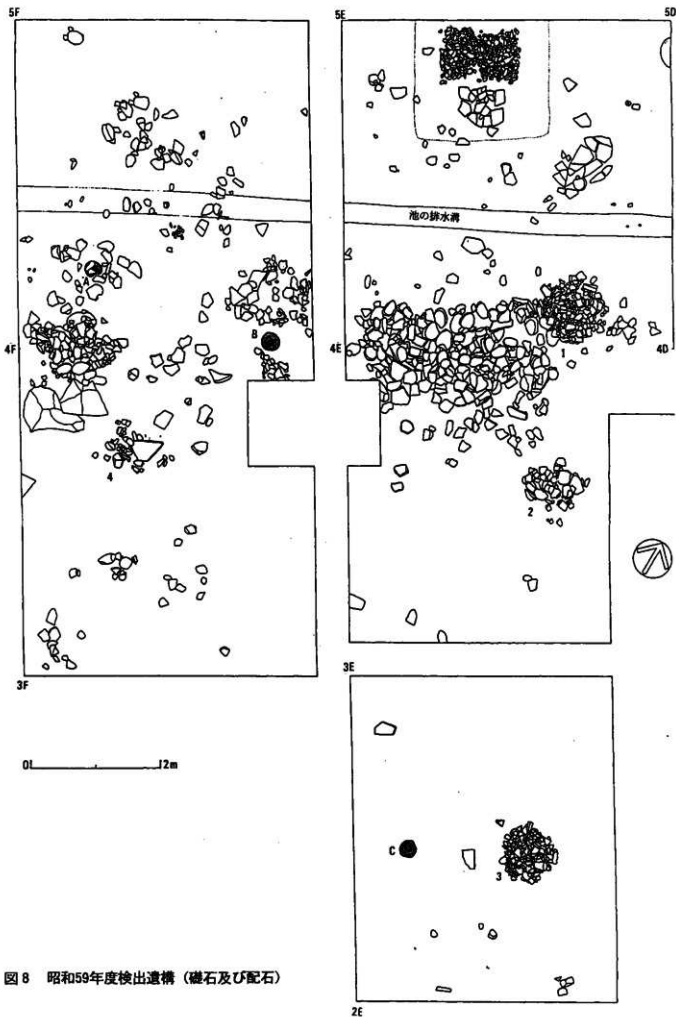


図8 昭和59年度検出遺構(礎石及び配石)

確認には至らなかった。

L12グリッドで検出された敷石は、長さ1m、幅1.4mに大小21個の偏平な割り石が配されており、20～30cm前後のものが多かった。レベルもほぼそろっており、平坦面を形成していることから敷石と考えられたが、面的に追究することができなかった。

5. 遺物

今年度の調査で出土した遺物は738点であり、陶磁器類、古銭、金属製品、ガラス製品であるが、その6割が陶磁器類、2割がガラス製品であった(表1)。

陶磁器類には、碗・皿・徳利・猪口・湯呑み・鉢・播鉢・甕・井・土瓶・仏花瓶などがある。いずれも破片で完形のものも少なかったが、大部分は近・現代のものである。

近世・近代と思われるものの中で、染付磁器の碗・蓋・皿について平成10年度からの分を含めて、完形に近いもののみを图示した(図9～11・写真14～16)。表3にあるように、殆どが肥前系で19世紀前半のものである。18世紀後半の肥前系染付皿(図11-11、写真16-11)が1点出土しているが、平成10年度調査区の道路部分からの出土で、伝世品の可能性が高い。その他は昨年度と同様破片が多く接合するものは少なかった。徳利は通い徳利と爛徳利が出土しているが、完形になるものはなかった。播鉢は10個体分が出土しているが、陶器で鉄軸が掛けられ櫛描きは密なものや若干粗雑なもののみ見られた。甕は5個体分出土しているが、1点だけ底部中央に径2cm程の小穴をあけたものが出土しており、植木鉢に転用したものと思われる。他に土瓶・段重・盃・蓋・急須・仏花器等が出土しているが、昨年度同様破片が多く完形になるものは少なかった。

土器は桃縄文後北C₂・D式で列石周辺で2点出土しており、国泰寺本堂横遺跡から流入したのものと思われる。

金属製品には鉄製品と銅製品が出土している。鉄製品は、釘、船釘、鏝、鉄鍋が出土している。釘は丸釘と角釘が多数出土しているが、ほとんどが丸釘で角釘は5～13cmのものが5点出土している。船釘は7cmと12cmのものが2点出土しており、鏝は長さ14cmで断面長方形のものが1点出土している。銅製品は古銭として寛永通宝が2枚出土している(表2)。

ガラス製品は、ビール瓶、一升瓶等の瓶類が殆どである。

以上が遺物の概略であるが、表1にも示したとおり3年間の調査で出土した遺物は6,000点を越えるものとなった。中でも陶磁器が7割を占めているが、ほとんどが破片で完形になるものは僅かであった。

種 別	平成10年度	平成11年度	平成12年度	合 計	備 考
陶 磁 器	3,364	485	445	4,294	磁器、陶器
陶 製 品	4	8	3	15	
土 器			2	2	縄文
土 製 品	7	2	2	11	
ガラス製品	388	328	128	844	ビール瓶、一升瓶
鉄 製 品	276	61	158	495	釘、鋸、鍋
銅 製 品	26	12		38	古銭、小鈎、キセル
木 製 品	67	2		69	
石 製 品	2	1		3	硯
骨 角 器	3			3	
動物依存体	236	4		240	獣骨、鹿角
植物依存体	1			1	
合 計	4,374	903	738	6,015	

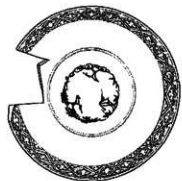
表1 出土遺物一覧

銭 貨 名	鋳造期間	時 代	平成10年度	平成11年度	平成12年度	計	備 考
寛永通宝	1636~1869	江 戸	7	1	2	10	鑄化
電10銭銀貨	明6~明39	明 治	1			1	明治24年
半銭銅貨	明6~明39	明 治	1			1	明治17年
桐1銭青銅貨	大5~昭13	大正 昭和		1		1	大正9年

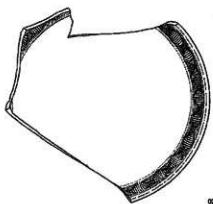
表2 出土銭貨一覧

図版	番号	種別	器種	口径	高台径	高さ	時期	備考
図-9 写真14	1 1	磁器	蓋	9.5	3.5	2.6	19c前半	肥前系染付、外面「唐草」、高台内「成化年製」銘、見込み「松竹梅」
図-9 写真14	2 2	磁器	蓋	(10.3)	4.5	2.9	19c前半	肥前系染付、外面「松竹梅」と「唐人」、高台内「大明年製」銘
図-9 写真14	3 3	磁器	碗	10.5	4.4	6.0	19c前半	肥前系染付、体部外面に格子文、見込みに斜格子文、口縁内外面工字文
図-9 写真14	4 4	磁器	碗	(10.3)	4.5	6.3	19c前半	肥前系染付、端反り口縁、体部外面花唐草文、見込み「成化年製」銘
図-10 写真15	5 5	磁器	碗	(10.3)	4.3	5.9	19c前半	肥前系染付、体部外面に草花文交互配置、見込み：葉文、縁絵：雷文
図-10 写真15	6 6	磁器	碗	(9.1)	3.9	4.8	19c前半	肥前系染付、端反り口縁、体部外面に「寿」字銘と梅花文
図-10 写真15	7 7	磁器	皿	14.5	8.9	4.3	19c後半	肥前系染付、型紙摺り、体部内面花文、見込み「松竹梅」文、体部外面唐草、高台内蛇の目軸はぎ
図-10 写真15	8 8	磁器	碗	10.5	4.2	6.1	19c前半	肥前系染付、体部外面丸文（中に縞文、格子文、四ツ割菱文等を描く）
図-11 写真16	9 9	磁器	碗	(9.8)	3.9	5.9	19c前半	肥前系染付、体部外面草花文、見込み「寿」字銘、口縁部内面半割菱文
図-11 写真16	10 10	磁器	碗	9.2	3.5	4.8	19c前半	肥前系染付、体部外面格子文、見込み「寿」字銘
図-11 写真16	11 11	磁器	皿	(13.6)	7.3	2.9	18c後半	肥前系染付、体部内唐草、見込み五弁花で、蛇の目軸はぎを施す
図-11 写真16	12 12	磁器	碗	9.7	(3.8)	(4.7)	19c前半	瀬戸美濃系染付、端反り口縁、体部外面草花文、見込み松文

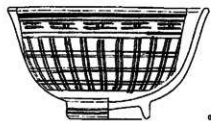
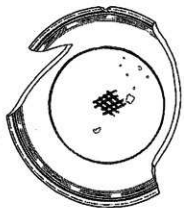
表3 陶磁器観察表



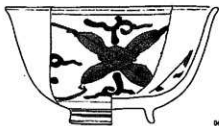
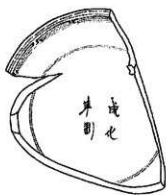
01



02



03



04

图9 造物实测图1 (盖·碗 (1/2))

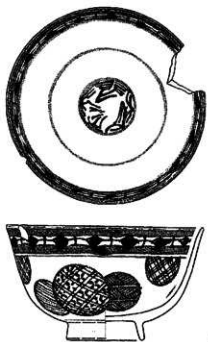
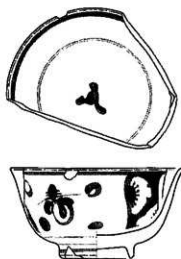
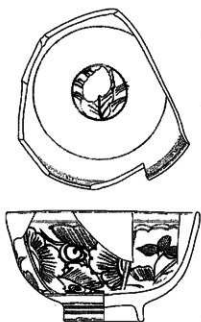
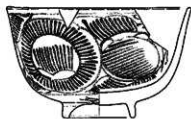
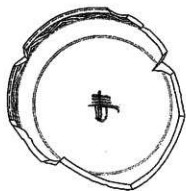
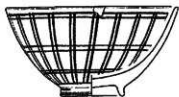
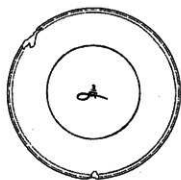


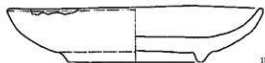
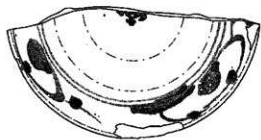
图10 遗物实测图2 (碗·皿 (1/2))



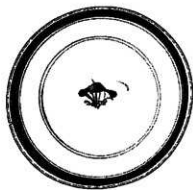
9



10



11



12

图11 遗物实测图3 (碗·皿 (1/2))

Ⅲ. ま と め

今回の調査は、昨年度に引き続き国泰寺境内の範囲確認及び遺構確認を主目的として実施したが、国泰寺創建に関わる遺構としては明確に確認されなかった。調査期間及び境内地に存在する種々の樹木や沢水の流出等により満足の行く調査とはならなかったが、列石及び敷石が検出された。

敷石の構築時期については、共存する遺物がなかったため明確ではないが、昭和59年度調査時の配石及び礎石と同様の面で検出されているので明治期と考えられ、列石についても敷石から急傾斜した面にあることから同様の時期と考えられる。図4に示したように昨年度H11・G11グリッドで確認された溝状遺構及び土留め板と、今年度I11～L11グリッドで確認された列石の延長がほぼ直交することが推測される。史跡国泰寺跡Ⅲでも述べたように北大真図書館蔵の「国泰寺境内」の写真(写真1)の手前に写っている橋の下部にあたる部分が、図13に示した「現今境内略図」との比較により溝状遺構及び土留め板と推測されることから、列石は単に土留めだけではなく、境内地を区画するものとも考えられるが、今回の調査では両端を確認することは出来なかった。

また、今回敷石と列石に高低差が認められ、列石の下部が青灰色粘質土であることや溝状遺構より北西側の盛土が厚いことから、境内地の範囲は溝状遺構の南東側で列石の北西側とみられ、『三航蝦夷日誌』の「景運山国泰寺 運上屋の上なる山二建てたり。」との記述がこの微高地にあたるものと考えられる。

陶磁器類等の遺物についても、肥前系磁器の時期が特定されたことで、国泰寺及び会所等に関係する資料が少しずつ明らかになってきた。今後も今まで出土した遺物との接合・復原を進めながら産地や年代の同定を続けることで、幕末から明治期の生活の様子を解明していかなければならない。今回、北海道開拓記念館のご好意で平成10年度に確認された2枚の火山灰についても駒ヶ岳c₂(1694)と樽前a(1739)であることが判明した。国泰寺には直接関係はないが、会所等や古環境を知る上で貴重なデータとなった。今後も、発掘調査を初めとする科学的手法による確認は継続していかなければならない。

『日鑑記』を初め国泰寺に関する文献史料は決して少なくないが、文献と出土資料に関する科学的データの検討を続けることによって国泰寺の歴史的役割の理解がさらに深められるものと言える。

2004年は、国泰寺の設置が決定して200年という節目であるので、歴史公園としての整備が進められ、資料の充実を図りながら研究を継続し、その成果を公表することで多くの人が身近に感じられるよう努力していかなければならない。本当の意味での国泰寺研究はこれから始まるものと信じている。

劍路國厚岸郡泰禪寺之真景



図12 劍路國厚岸郡泰禪寺の真景（北海立志図録より）



図13 現今境内略図（厚岸町郷土館蔵）



写真1 国泰寺境内（北大附属図書館蔵）

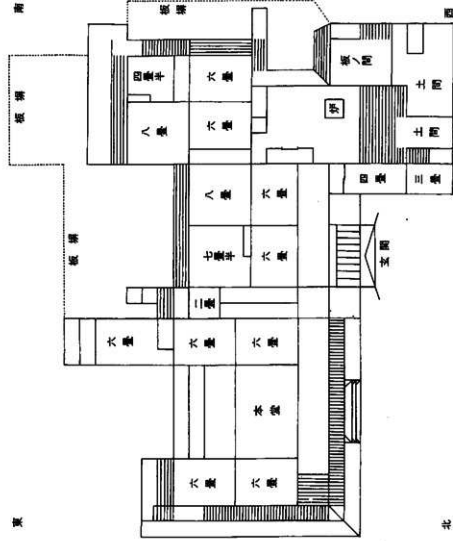


図14 安政4～6年以降の国泰寺平面図（劉路市立博物館館報№.295より）

引用・参考文献

- 1890 高崎龍太郎著『北海立志図録』北島社
- 1975 厚岸町史編纂委員会編『厚岸町史』上巻 厚岸町
- 1981 松下亘他「駄知産三平皿について」『北海道開拓記念館研究年報』第9号 北海道開拓記念館
- 1983～1986 財団法人北海道埋蔵文化財センター編『史跡 松前藩戸切地陣屋跡』上磯町教育委員会
- 1984 浜益村教育委員会編『荘内藩ハママシケ陣屋跡の調査』浜益村教育委員会
- 1985 西 幸隆・松田猛編著『史跡 国泰寺跡』厚岸町教育委員会
- 1985 西 幸隆著「史跡国泰寺跡—国泰寺の改築経過と位置及び規模について—」『釧路市立博物館館報 No.295』釧路市立博物館
- 1985 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅲ』白老町教育委員会
- 1986 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅳ』白老町教育委員会
- 1987～1988 佐藤一夫編著『弁天貝塚Ⅰ～Ⅱ』苫小牧市埋蔵文化財調査センター
- 1989～1993 宮 宏明他『大川遺跡発掘調査概報Ⅰ～Ⅳ』余市町教育委員会
- 1990 函館市教育委員会編『特別史跡 五稜郭 箱館奉行所跡発掘調査報告書』函館市教育委員会
- 1992 北海道大学附属図書館編『明治大正期の北海道〔写真編〕』北海道大学図書刊行会
- 1992 松前町教育委員会編『史跡 福山城 IX』松前町教育委員会
- 1994 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡保存管理計画策定事業報告書』厚岸町教育委員会
- 1996 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡保存整備基本計画報告書』厚岸町教育委員会
- 1996 白老町教育委員会編『史跡白老仙台藩陣屋跡環境整備事業報告書』白老町教育委員会
- 1998 宇田川洋・豊原熙司著『元村遺跡』標茶町教育委員会
- 1999 岡田淳子・宮 宏明編『入舟遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
- 1999 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡 II』厚岸町教育委員会
- 2000 厚岸町教育委員会編『史跡 国泰寺跡 III』厚岸町教育委員会



写真 2 調査風景



写真 3 調査風景



写真 4 突測状況



写真5 列石検出状況(南東より)



写真6 列石検出状況(北西より)



写真7 敷石検出状況



写真8 敷石検出トレンチ



写真9 平成10年度道路及び溝状遺構土層断面



写真10 平成10年度溝状遺構検出状況



写真11 平成11年度溝状遺構及び土留め板検出状況

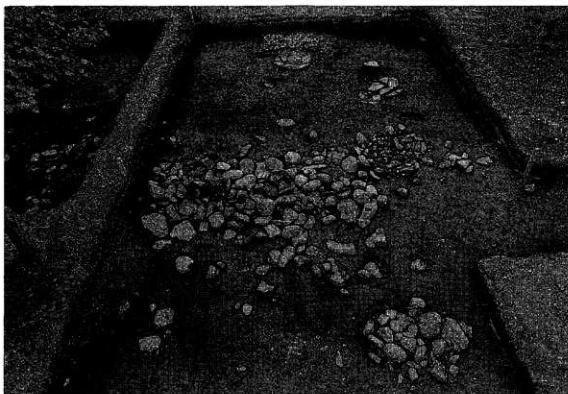


写真12 昭和59年度配石遺構 (3・4-D区)

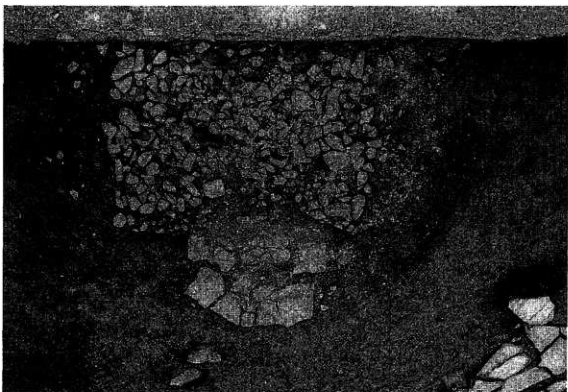


写真13 昭和59年度配石遺構 (4-D区)

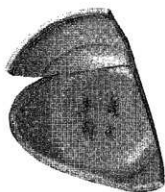
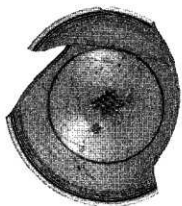
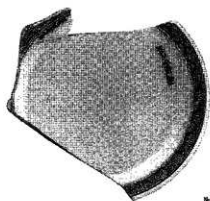
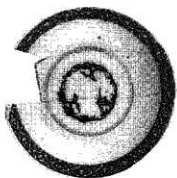
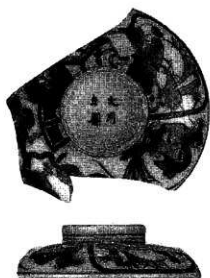
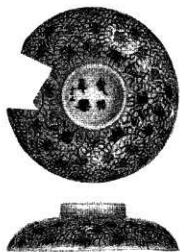
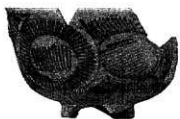
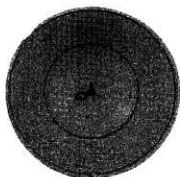


写真14 出土遺物1 (蓋・碗 (1/2))



No. 9



No. 10



No. 11



No. 12

写真16 出土遺物3 (碗・皿 (1/2))

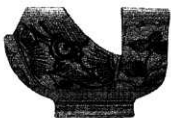
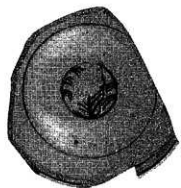


图5



图6



图7

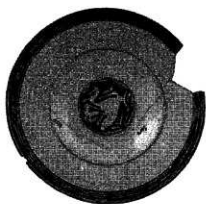


图8

写真15 出土遺物2 (碗・皿 (1/2))

報 告 書 抄 録

書 名	し せ じ じ じ じ じ 史跡 国 泰 寺 跡 IV
副 題	平成12年度発掘調査報告書
編 著 者 名	熊崎農夫博
発 行 機 関	北海道厚岸町教育委員会
所 在 地	北海道厚岸郡厚岸町字真栄町1条2番地1
発行年月日	2001年3月31日

遺 跡 名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
し せ じ じ じ じ じ 国 泰 寺 跡	あ っ し じ じ じ 厚岸町 む け づ ち じ じ 湾月町1丁目 15番地	M-03	7 4	43° 01'	140° 50'	2000年 6月19日 ～ 7月7日	100㎡	遺構確認 調査

遺 跡 名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項
国 泰 寺 跡	史 跡	江戸後期 近 代	列石 敷石	陶磁器 金属製品 ガラス製品	

史跡 國泰寺跡Ⅳ

平成12年度
発掘調査報告書

発行 平成13年3月31日
発行者 北海道厚岸町教育委員会
印刷 有限会社 厚岸印刷